# つながる、立ち上がる、推進する



取り組みである。その方法論や実証事例を紹介する。推進しつづける「地域愛でつながる協働チーム」を立ち上げる(観光ジバづくり)に取り組んでいく上で、その中核となって主体的にジバ観とは、地域全体でイキイキした観光地域づくり のため の協働チ **公育成研究** 

実証事例 ] 岐阜県白川村 魅力ある観光地域づくり推進事業

# 数多くの問題を抱えているどんな観光地域も

間や宿泊客が一向に増えないこと。 と。通過点になってしまい、 住民が暮らしにくさを感じているこ 行政と民間の連携が十分でないこと。 なチャレンジができていないこと。 さまざまな面で格差が広がっている 訪れる場所とそうでない場所があり 抱えている。地域内に観光客が多く 光地域でも、 うまくいっているように見える観 した問題にどう対応したらよい 日々の忙しさに追われ、新た 実はたくさんの問題を 滞在時

> こに1つの解決方法を提示する。 めの協働チー ム育成研究)」は、

域内外に「観光地域づくりのネッ また、そのチームを中心にして、 担う「地域愛でつながる協働チー ジョン設定から実行までのすべてを ム」を立ち上げ、 ク」を広げていくことだ。 育成することだ。 地

が一緒になって、

自分たちの手でイ

キイキしたまちづくりにチャレンジ

し続けること」が極めて重要だと考

かといえば、「行政と地域の皆さん なぜ協働チ

のか。「ジバ観(観光ジバづくりのた

# 担う協働チームを育成しよう企画から実行までのすべてを

ジバ観が提案するのは、 企画やビ

ムづくりを提案する

えるからだ。

先に挙げたとおり、

ど

んな地域にも問題は次から次へと生

分ごと」として考え、 それよりも、観光地域づくりを「自 どに任せたりするのは不可能だろう 行政が担ったり、 まれてくる。それらの解決をすべて 地域外の専門家な 主体的に企画

テーマ 高めることにつながるからだ。 が主体性を育み、チー めてアイデアを形にし、新たな気づ できるだけ自分たちの力で情報を集 らうようにしている。この積み重ね きや学び、 いる。 やフレームを提供するに留め 小さな成功体験を得ても たとえば、 こちらからは ムの継続性を

(渦の中心)」となって地域内外にネ

- クを広げ、

行政や専門家と

やビジョンをつくり、

心とな

て実行する「行政+民間の協働チ ム」を立ち上げて、彼らが「渦元

# 3つの陥りやすいパタ・ジバ観の3フェーズと

気持ちも動きも重くなる

戻す第一歩になる。それがジバ観 始めることが、まちの全体性を取り

基本的な考え方である。

え続けたほうがよいと思うのだ。

地域愛でつながる協働チー

ムから

力を合わせて、

地域全体で地域を変

フェーズからなる (図1)。 を描いて」「③まずやってみる」の3 ジバ観の ムをつくり」「②共有ビジョン プログラムは、「①協働

育成プログラムを用意

関係性」と「主体性」を高める

# フェーズ1:協働チームをつくる

者一人ひとりに直接会って想いを伝 とが大切だ。また、仕掛け人が候補 図となるようなチー の多様なメンバーを集め、地域の縮 地区・職種・団体・年齢・性別など 地域への想いがあることを条件に、 ムづくりは、最初が肝心だ。 もらうことも欠かせない。協働チ つくってみたい」と共感・共鳴して え、「この人と一緒にまちの未来を まずは、 ムづくりを行っていく。このとき、 仕掛け人とともに協働チ ム編成を行うこ

や情熱を共有する時間を大切にして

したことを丁寧に話し合

慢している悩みや不満、 同士が対話を重ね、

不安なども

口に出すことで、

互いの秘めた想い

践に結びつけるプログラムだ。 ともに学び合って主体性を高め、

たとえば、ジバ観では、メンバー

普段言えずに我

ムメンバー同士が良い関係を構築し

実

ジバ観が提供するのは、

協働チ -ムをつくる代わりにやっ を行政や地域外の専 地域づくりや

くのだ。

仲間としての関係性が良くなってい

ー同士の相互理解が進み

組みの方向性を描き出していく過程

ながら、チ る。そう

ムのビジョンや取り

図1 ジバ観の3フェーズと陥りやすいパターン 陥りやすい パターン ジバ観の 3つのフェーズ 外部に依存する 1:協働チームをつくる 他人ごとにする 自分ごとにする 問題を特定しようとする 2: 共有ビジョンを描く 疲弊感や無力感が募る 積極性や主体性が増す 失敗を回避しようとする 3:まずやってみる

次の一歩に進みたくなる

では、地域の問題解決能力はいつま 「他人ごと」になってしまう。それ 門家に任せてしまうことだ。そうす でも上がらないだろう。 住民にとって地域づくりが

# フェーズ2:共有ビジョンを描く

**一全員で描いていく** 地域の姿「共有ビジョン」をメン メンバーが心から願う未来

が失われてしまうことが多い。 がない」といった地域の悪い面ばか けようとしてしまうと、「設備が古 特定型アプローチ」だ。問題を見つ りが目につくようになって、 い」「交通の便が悪い」「周囲の理解 - に無力感や疲弊感が募り、 このときに陥りやす 地域の価値や魅力 11 のが「問題 積極性 メンバ それ

> にフォ をさらに大きくするための共有ビジ ョンを描くことが大切なのだ。 ーカスを当て、 地域の可能性

# フェーズ3:まずやってみる

きが損なわれてしまう。 てしまい、チャレンジする意欲や動 反対意見まで丁寧にピックアップし するほど、想定に過ぎないリスクや も「失敗回避思考」が働きがちだ。 チャレンジする際には、どう 失敗を回避しようとすれば

「できることからまずやってみる」 ら一歩を踏み出したことが、 改善点も見えてくる。何より まくいった点は自信につながるよ ことを勧めている。そうすると、 ジバ観では、それを避けるために

てしまいがちなのが、

る機会を持ってもらうことも重視また、話し合うだけでなく、実践

17 June 2018 とーりまかし

岐阜県白川

# 力ある 観业 IJ

「魅力ある観光地域づくり推進事業」に取り組んだ。その内容を紹介したい2017年7月から12月にかけて、ジバ観は岐阜県白川村の

DMOなど入口はさまざま観光づくり、まちづくり、

るが、 県琴平町のまちづくり協働チー 上げなどに取り組んできた。 バ観の入口はさまざまで、 山形DMOの三市協働チー ズに対応することができる。 いた「観光づくり」のための協働 0]記事 ム育成である ジバ観ではこれまでに、 まちづくり、 まかし』49号の「コク の企画・ 内に詳しく説明してい 村の実証事例は、 実行をゴ DMOなど、ジ 多様なニ ムの立ち 観光づ 香川 今回 モニ 4

れる。

白川村は、

9

95年に

白川郷が世界遺産に登録さ



尾崎達也さん

はうなぎ上りとなって、 世界遺産エリアの観光客数 できるようになったことで からも1時間程度で行き来 最終的に高山からも新高岡 2002年に全線開通し、 増加も緩やかだった。 間がかかる観光スポ その頃はまだ訪れるのに時 れてから観光客が増えたが し、「東海北陸自動車道」が トで、

滞在時間が短いのが大きな悩み観光客は激増したが

山村だ。 「合掌造り 村は、 まちは北部の荻町を中心と 0 16 郷」で有名な岐阜 Ŏ 0 人ほどの

南部の平 「白山エリア」に大きく分か した「世界遺産エリア」と、 瀬を中心とした

人以上が訪れるまでになっている。 特に外国人観光客が激 いまでは年間 170万 0)

ここ数年は、

なかったが、

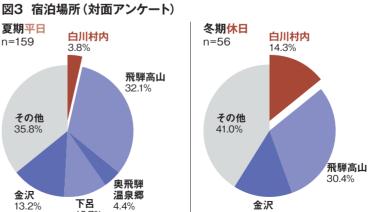
題をいくつか抱えている。 増している。 しかし実は、 村は観光での課 なかでも

まう人が半数以上だった(図2)。 調査」によれば、 番の課題は、「滞在時間の短さ」だ RCが行った「白川村観光客動態 60%以上が2時間未満しか滞在せ 休日でも3時間未満で帰ってし 冬期平日は観光客

図2 白川村観光客の滞在時間(対面アンケート) 0 20 40 60 1時間未満 1時間以上~2時間未満 2時間以上~3時間未満 ■冬期平日滞在時間 n=131 ■冬期休日滞在時間 n=59 3時間以上~4時間未満 ンケートでは季節を問わず [1時 4時間以上~5時間未満 間以上~2時間未満」が最も多 かった。冬期平日は特にその割 5時間以上~6時間未満 合が高く、64.1%を占めた。冬 期休日でも半数以上が「1時間 6時間以上 以上~3時間未満」だった。

# 人08

10.7%



宿泊場所は「飛騨高山」「下呂」「金沢」が多く、この3エリアで回答の半数を超えるこ とがほとんどだった。白川村で宿泊する人は比較的少なく、対面アンケートの結果で

14.3%

夏期平日 n=159

観光地としての経営も自然と 魅力的に感じるお客様が

分たちの暮らしに誇りを持つことが (合掌造りの屋根材として使われる そして、私たちが幸せな暮らしを の自然など、 伝統や資産を大事にして、 白 合掌造りや茅にゅう 山エリアにある大白 味噌や醤油をベ 束にして積み上 村の長い間変わ ど 自 n

調査でも明らかで、

村の宿泊客

ていくことは難しい。

の受け入れ数に限界があることを差

少ない。

普段は観光客全体の10

冬期休日でも

15%に満たな

東海北陸自動車道白

「郷IC

か

課主査の尾崎達也さんは、

こう

状況に以前から危機感を覚えて

11

いても、

村内の宿泊客数はかな

の観光格差」だ。

北部の世界遺産エ

とは違って、

南部の白山エリア

事業」の仕掛け

村観光振興

回の「魅力ある観光地域づくり といった地域課題も少なくない。 を中心とした人口流出が止まらない で買い物困難者が増えている、

推進

今

もう

1つの大きな悩みが、「村内

地」なのである。それは宿泊場所の

しても、

リピー

ターの増加につなげ

今の状態では、観光客を増やしたと

動に忙殺されている、高齢化が進ん

若者

消防団やお祭り、除雪などの地域活

住民たちが家業に加えて

白川村の魅力を十分に伝えられない からわかっている。滞在時間が短く

高山と金沢の間にある「通過型観光

い換えれば、現在の白川村は、

だけなら、2、

3時間で十分なのだ

て少ないことだ。ただ白川郷を見る

問者の満足度を下回ることもデ

タ

がるばかりである。

の総合満足度は初回訪

増えておらず、

南北の観光格差は広

ら離れていることもあって観光客が

光スポット

や体験ツア

などが極め

その主な原因は、

白川郷以外の観

0)

が現状だ (図3)。

40歳を過ぎてからでした。若 した伝統・資産を大事にする 村に誇りを感じ、 いまはまだ村に浸透しきっ もっと早くから村のあれ 今回、 ジバ観の皆さ 実を言えば いたいと思 ずっと白

# 協働チームの立ち上げだっ理想の観光地への第一歩が た

「ミニ茅にゅうづくり体験(21ページ)」は、村の伝統の1つ、

茅にゅうに触れるモニターツアーだ。

には、 て、その幸せをお客様におすそ分け は明るくなっていきません。 ち役場の想いがありました」と、 最も大事にしたいのです。 ことですが、 るという意識が強い。それは大事な みんなはお客様に来ていただいて 崎さんは言う。「いまはまだ、 くてはなりません。今回の協働チ していくというのが、 「私たちは、 理想の姿です。 づくりの発端には、 自分たちが幸せな暮らしをし いま村の『根っこ』を変えな 何より それだけでは村の未来 も村民の幸せを うなれたら、白 そう そのため した私た 誰より 村 尾 0

白川郷の合掌造りはいまや日本だけでなく、世界でも広く知られるようになってきた。

安定していくと思うのです。

らない 何よりも大事です ぶろく祭り、 スにした出汁で作る郷土料理)、 つぶした大豆と、 げたもの)、すったて(石臼です 茅を保存するため、 送るためには、

は、 私自身、 意識は、 川村で暮らしていく覚悟を決めたの うと思ったのです」。 第一歩として、 っています。その意識を村に広める これを誇りに思ってもら ているとは言えません。 んとともに協働チー ムを立ち上げよ

は10%に満たないことが多かったが、唯一、冬期休日だけは14.3%を占めた。 ※調査実施日/夏期平日: 2017年8月22日(火)、冬期休日: 2018年1月27日(土)、冬期平日: 2018年1月29日(月) ※調査実施場所/白川村荻町せせらぎ駐車場

けとなって、

2017年7月からジ

尾崎さんのこうした想いがきっ

観の協働チ

ム育成プログラムが

白川村の郷土料理・すったてを

使った「すったて鍋」は村の新た

な魅力の1つだ。

# 66カ月を振り返る

## 第⑧回 2017年11月30日 第⑨回 2017年12月12日

8回目・9回目は振り返りの時間だ。8 回目は協働チームの自主開催会議で、モ ニターツアーをこれから継続的に実施・ 運営していく上での課題の洗い出しを行 った。どうすればもっと良いツアーになる のか、どうすれば何回も継続して実施で きるのか、どうすれば採算がとれるのか といったことについて、夜遅くまで時間 を忘れて知恵を出し合った。課題は多い が、一つずつ解決していけば、いくつか のツアーは本格的に実行・運営できるこ とが見えてきた。9回目は、この6カ月の 振り返りとして、モニターツアーの挑戦か ら見えてきたことを改めて一人ひとりが内 省して学びを深めたり、全員が全員に対 して成長・変化・感謝のフィードバックを して関係性を改めて深めたり、次年度の 取り組みについて話し合ったりした。





全員が全員に対して付箋をつけてフィードバック をしていった

## 4 モニターツアーを実施する

## 第7回 2017年10月25・26日

いよいよ7回目に、以下の4つの「モニ ターツアー」を実施した。

- ●白川郷世界遺産エリアを楽しく学ぶ「ウキウキナゾときラリー」
- ●合掌造りに欠かせない茅の保存のため に作る茅にゅうについて知る「ミニ茅にゅ うづくり体験」と合掌造りの旧遠山家で 地元食材をふんだんに使ったごはんをい ただく「遠山家ごはん」
- ●白山エリアにある白山国立公園大白川 園地で遊ぶ「大白川トレイル」
- ●白川村の名物料理・すったて鍋を学ぶ 「すったて鍋づくり体験」

ツアー参加者には、村民と交流しなが ら、合掌造り、茅にゅう、大白川、すったて など、白川村がもともと持っていた文化や自然をより深く体験できるツアーを実際に体験していただき、終了後の2日目には彼らから忌憚のない意見をいただいた。また、ツアーを実施するにあたっては、地元のレストラン(遠山家ごはん)や料理人(すったて鍋づくり体験)、トヨタ白川郷自然学校のスタッフ(大白川トレイル)など、地域内のさまざまな方に協力していただいた。



ウキウキナゾときラリー



大白川トレイル



遠山家ごはん



モニターツアー後の振り返り会



ミニ茅にゅうづくり体験



すったて鍋づくり体験

# **3**モニターツアーを 準備する

第④回 2017年9月7日 第⑤回 2017年9月29日 第⑥回 2017年10月5日

次の3回の会議では、「モニターツアー」の企画・計画を行った。話し合うなかで、「観光客の多くは世界遺産エリアを1、2時間見て回ったら帰ってしまう。それでは本当の村の良さが伝わらないのではないか」「合掌造りのほかに何かありますかと宿泊客に聞かれたとき、何も答えられない」といった問題が浮かび上がってきた。また、観光動態調査から、リピーターや若い世代の観光客が少ないことなども明らかになった。これらの問題を解決するために、魅力的かつ実現可能性の高い体験ツアーのプランを考えるという取り組みを持つことにしたのだ。

そこでまず、「マンダラート」(下部写真)という発想ツールを使って各自がアイデアを出し、そのアイデアからプランを生み出していった。それらの中からモニターツアーで実施するプランを決め、実際にビジネスに使われているフォーマットシートを使用して、スケジュールや手順、実行者、料金などを明確にしていった。次に、実行すると決めたツアー企画ごとにチームを組み、SNSで各チームのグループを立ち上げて、各自が空き時間を使って着々と準備を進めていった。





# 岐阜県白川村の協働チーム 育成ストーリー

今回のプロジェクトでは、6カ月で全9回の会議を行った。 (※そのうち1回はメンバーによる自主会議) エピソードを交えながら、その全貌を紹介する。

## ●協働チームを立ち上げる

協働チームのメンバーは尾崎さんが選び、直接声をかけていった。「メンバーの皆さんを口説く自信はありました。なぜなら、多くの村民が『何かを変えなくてはならない』「自分は変わらなくてはならない」と思っていて、そのきっかけを求めていたからです」(尾崎さん)。その結果、世界遺産白川郷合掌造り保存財団で働く女性職員、民宿の若旦那兼おみやげ店の

主人、合掌造り民家園のスタッフ、合掌造り公開施設の若旦那、地元の和菓子職人、白山エリアの民宿の若女将と旅館の若旦那、製造工場に勤務する白山エリア住民、そして村役場の若手メンバーと、尾崎さんを加えて計10名が参加することになった。村の中堅・若手層を中心に、北部・南部から多様な立場・職業のメンバーが集まって、協働チームが始まった。



# 2共有ビジョンを考える

第①回 2017年7月27日 第②回 2017年8月1日 第③回 2017年8月26日

協働チーム会議の最初の3回は「チー ムビルディング|「個人ビジョンの共有| 「共有ビジョンづくり」を主眼に置いて 行った。ジバ観では、序盤にペアインタ ビューで想いや価値観を語り合ったり、 什掛け人が自分の想いをストーリーテリ ングしたりして、お互いを知る時間を多く 取るのが通例だ。長年同じ地域に住んで いても、それぞれがどういった想いを抱 いているか、何を考えているかは意外と 知らないものだ。協働チーム内の絆と学 びを深めるには、こうしたことを知り合う 時間が欠かせないのだ。その上で、実現 したい未来をみんなで話し合って白川村 の「ありたい未来」を創り出し、最高の未 来像を「寸劇」で表現するなどして、共有 ビジョンを固めていった。最終的に、共

有ビジョンは「暮らす人も訪れる人もどこにいっても楽しめる白川村」に決定。また、3回目終了後からSNSを使ったスケジュール相談や進捗フォロー、宿題の共有などを始め、会議と会議の合間にもコミュニケーションを活発にしていった。





21 June 2018 &—ŋŧħt June 2018 20

## 持続する観光地域づくりのために 1人ではなくチームで取り組もう

観光地域で暮らす人々の生活は本当に忙し い。将来の観光地域づくりを担う若手世代と 話すと、ホテルや旅館、土産屋などを営みな がら、消防団や青年部など、地域の日々の生 活を支える役をいくつも掛け持ちしている、と いう人が多い。「観光をもっと盛り上げたい」と 「日々の暮らしをより豊かにしていきたい」。観 光づくりと地域づくり、この2つの両立は、決 して簡単なことではないはずだ。

ではないだろうか。



じゃらんリサーチセンター 研究員

地域内外の人を惹きつけていく地域・観光ブランドづ くりの基盤となるチームを、行政・民間・住民の協働 を起こすことでつくりあげていく「観光ジバづくりのた めの協働チーム育成研究(ジバ観)」を担当。

# 研フ鑽ァ 類の場り もテ 意タ しての

1.1

る

33

ジバ観自体のことや今後のジバ

観の

動きなどにつ

いてお伝えする

き合うことだ。

と研究員 スデザ 村のプロジェクトでは、 進めている。 というチ と菊野陽子さんが事業全体のプロセ ム会議を担当するファシリ ジ 地域自らが変わろうとするプ 親は、 を行った。 ンと各会議でのファ (草刈)、 地域の現状に寄り添い ム体制でプロジェク エリア たとえば、 そして協働チ 彼らが重視 プロ ロデュ 平澤勉さん 今回の白川 テ

崎さん て 術や観光地域などにつ 域で実践を積んで ひまをかけて良いものをつくり とを深く理解してくださって、 たちと同じ方向を向き、 ときに私たちとぶつかりながら、 なお、 クトがうまく テー つだと感じてい いく関係を築けたことが、 んはこう ノバ観では、 0 ファシリ お二人に情熱があ いるフ ・ます った大きな要因の てい いて学び合う ŕ さまざまな地 私たちのこ ーショ シリ っ フ プロジ 手間 って テ 上げ 私 シ

# 2 年 目 村。 1も継続する-

い新たな観光地域を募集している。

川村のように楽しい観光づ

地域づくり

の両立を目

ジバ観では協働チー

ムを育成した

2年目 るとともに、 伝えしたい。 最後に、 づくり)を地域づくり った観光づく も継続する。 今後について少 協働チ 白川村プロジェクト 2年目 ムの動きを村 (モニタ と接続す は、 しだけ 年 は お

供できるはずだ。

お悩みの地域が

ぜひご相談いただきたい

・地域には、

0)

ウ

ウ

らない 実践と学びを続ける協働チ合宿を定期的に開催してい も常に実践と学びを続けなけ 成するには、 バ観はそう考えて フ / アシリテ タ る。 ればな 11 自 自

琴平町、 例やノ 横のつながりをつくり、 内全体に波及させ、 ィをつくる構想も練 また、 方広げてい ゥ これまでに取り ハウを共有するコミュニテ 山形DMO、 って ŋ いる。 お互いの事

ムを育 身

きたいと考えている。 組んできた 村などの

# 担当研究員より

今回ご紹介した岐阜県白川村の協働チーム メンバーも、このような環境の中で日々生活 している。彼らは今回、村の実現したい姿(共 有ビジョン)を「暮らす人も訪れる人もどこにい っても楽しめる白川村」と表現した。観光客が 楽しめることはもちろん、地域で暮らす人々も 日々楽しみを感じながら生活ができる。観光 づくりと地域づくりの両立というありたい姿を 表す1つのイメージとして、同じようなビジョン を描いている地域は、他にもいくつもあるの

一方で、地域の観光を盛り上げていこうと 奮闘している方々に1人ひとり話を聞いて回る と、同じようなビジョンを描いているにもかか わらず共に動くことができておらず、孤独感や 疲弊感を感じている方が多いという現状もあ ると感じている。

地域をよりよくしていきたい。次の世代に豊 かな暮らしや文化を継いでいきたい。そんな 「地域愛」で1人ひとりがつながり、自分たちの 地域の未来をつくるために立ち上がるチーム が生まれていく。そしてそのチームが取り組み の起点となり、観光地域づくりが大きく成長 していく。それがジバ観を推進する私たちが 描くありたい姿だ。実現に向けて、引き続き 地域の皆さんと共に"チーム"で取り組んでい きたい。

# 草刈良允

## 岐阜県白川村 魅力ある観光地域づくり推進事業

# 協働チームメンバーの声

協働チームに参加したメンバーに、 半年間の感想やいまの想い、これからの展望などを伺った。

## 「北部が羨ましい」から 「一緒に良くなろう」に変わった



大澤江美さん

旅籠 白山館 若女将

以前から、私の住む白山エリアの観光客 の少なさに危機感を抱いていました。また、 白川郷観光以外のアクティビティがほとんど ないことも問題でした。たとえば、悪天候 で白川郷の散策が難しいとき、当日でもお 客様に勧められる体験ツアーが何かほしい のです。今回、モニターツアーづくりができる と聞き、それならと思って参加しました。本 当に濃密なプログラムで、その期間はいつも チームやツアーのことばかり考えていました。 マンダラートなどの宿題は難しかったですが、 学ぶことが多く、ツアーも楽しくできました。 個人的には「ミニ茅にゅうづくり体験」が気 軽にできるようになれば、お客様に勧めやす くていいと思います。

あと、協働チームのみんなと仲間になれ たのは大きな財産です。顔見知りではあった けれど、どんなことを考えているかまでは知 りませんでした。それが今回、全員の考えを 聞いて、尊敬できる人たちばかりだと思うよ うになりました。それから、北部の見方も変 わりました。これまでは、世界遺産エリアは 観光客が多くて羨ましいとばかり思っていた のですが、その伝統や価値を守ることの大 変さを知りました。いまはもう北部が良いな どとは思っていません。一緒に良くなってい けたらと思っています。

## お土産処のお客様を増やす 方法も考えられるように



大谷直之さん

民宿 幸工門 若旦那 お土産処 かたりべ 店主

協働チームに入ったのは、自分にとって良 い勉強になるだろうと思ったからです。とい うのは、私は実は昨年まで建設業に就いて いて、ちょうど民宿とお土産処の仕事を始め たばかりだったのです。チーム会議の序盤は わからないことだらけで、3回目くらいでよう やく趣旨がわかってきました。結局最後まで 不安で一杯でしたし、話すのが苦手というこ ともあって会議のすべてが大変でしたが、こ の半年でかなり話すのに慣れ、どうすれば お土産処のお客様が増えるのかといったこ とも考えられるようになりました。

私のお土産処は、バス停車場方面からだ と世界遺産エリアの入口のところにあるの で、お客様の動向がよく見えます。ですから、 早い人だと、たった1時間ほどで帰ってしま うのを知っています。そうしたお客様を見る たびに、もっと住民や文化と触れ合っていた だき、また来たいと思っていただけたらと思 うのです。そこで私も、白川村の伝統工芸 「ヒデ細工」を習い、宿のお客様に教えるサ ービスを始めようとしています。また、「春駒 踊り」という村の祝い踊りや「祭りの一座」に も参加し、村の文化を楽しみながら受け継い でいます。これから協働チームをもっと大き くして、こうした文化の継承にも、メンバー と一緒に取り組んでいけたらと思っています。

## 暮らす人も訪れる人も 楽しめる白川村にしたい!



滝麻衣子さん

世界遺産白川郷合掌造り保存財団 職員

今回、協働チームに加わったのは、「白川 村はこのままでいいのだろうか?」という想い からでした。何よりも、住んでいる私たち自 身が楽しめていないことが気になっていたん です。私たちには、どこかに「お客様は来て くれて当たり前」で、「これまで通りにやってい ればいい」と思ってしまっているところがあり ますが、それでは良くありません。そうでは なくて、遠いところからわざわざ来てくださっ たお客様たちともっと話したり、おもてなし したりする積み重ねで、暮らす人も訪れる人 も楽しむ白川村、何年後にもお客様の記憶 に残る場所にできたらと思っていました。

体験ツアーもそういう白川村を創る手段の 1つです。今回のモニターツアーで、将来的 にツアーを実現できる道筋が見えてきまし た。また、個人的には最初は何のアイデア も出なくて辛かったのですが、いまではネッ ト情報などを参考にして、自らツアーのアイ デアを考えるまでになりました。次は、村の 若手などを巻き込んで、みんなで話し合う場 を創りたいと思っています。そうした場から、 自分たちが楽しく過ごすためのヒント、お客 様をおもてなしするヒントがきっと出てくるか らです。協働チームに参加する前は「なんと かならんかなあ」と思っていましたが、それが いまは「何とかしなきゃ」に変わりました。

23 June 2018 と一りまかし と-hまかし June 2018 22